

第 29 回全国小学生作文コンクール

「わたしたちのまちのおまわりさん」

受賞名：優秀賞（高学年の部）

タイトル： 私たちの安全を守るおまわりさん

氏名： 中田 光咲（ナカダ ミサキ）

小学校名：福井県 福井市立日之出小学校 五年

「お急ぎのところすみません。シートベルトの確にんをお願いします。」

私たち家族が、車で出かけた時のことです。

信号待ちで車が止まった時、一人のおまわりさんが、道路わきから声をかけてきました。

「え？何か私たち、悪いこと、した？」と心ぞうが破れつしようにどきどきしました。

おまわりさんに声をかけられたのは、初めてだったからです。

その時、車を運転していたのは、私のお母さんでした。お母さんは、けい察官です。

車に乗る時は、いつもシートベルトをして、後ろに乗っている私たち兄弟がシートベルトをしているのを確にんしてから発進します。

でも、車に乗りながら上着をはおる時とか、何かの用事でお母さんには内しよで一時的に外すこともあって、そのまま、シートベルトをするのを忘れてしまうこともあります。だから妹や弟がきちんとシートベルトをしているかわからず、私はとても不安になりました。

「シートベルトをしていなかったら、逮捕されるのかな、どこかけい察しよに連れていかれておまわりさんにきびしくおこられるのかな。」と色々な思いが頭の中をぐるぐるまわって、急いで妹と弟のシートベルトをのぞきこみました。

2人とも、しっかりとシートベルトをしていました。

「よかった。」私がほっとするのと同時に、信号が青になりました。お母さんは、おまわりさんに頭を下げてから車を発進させました。

おまわりさんは、私たちが全員シートベルトをしているのを、窓の外から確にんして、にっこりとうなずき、「それでは、お気をつけて。」と送り出してくれました。

それから、車の中で、おまわりさんに声をかけられてびっくりしたこと、全員がシートベルトをしていてほんと安心したこと、おまわりさんはこんな暑い日にも交通のとりしまりをしていて本当に大変だと思ったことをみんなで話し合いました。

その日の帰り道、道路の信号が青信号から黄色信号になった時のことです。

お母さんがいつもよりも強くブレーキをふんで、私の体が、ざ席から前に飛び出しそうになったのです。私より体重が軽い弟は、私よりもっと前に飛び出しそうになっていました。

シートベルトをしていたので大丈夫でしたが、弟が、「シートベルトをしていて良かった。」

とつぶやいたので、私と妹は同時に、

「本当に、そうだね。」と言いました。

その日の夜、お父さんに、このことを話すと、車が急に止まった時に、体が前に飛び出す現象は、遠心力で、車から体が飛び出して死んでしまう人もいること、特に子供は体重が軽いから気を付けなさいと教えてくれました。私は、昼間のおまわりさんを思い出して、暑い日も汗を流して私たちの安全を守っていてくれるんだなと改めて感じました。